

[エッセイ] 〈聴くこと／語ることをめぐる遊歩〉

物語ることへの誘惑～柳田國男『遠野物語』～

井 谷 信 彦

1. 柳田邸にて——主客が編みあわされるとき

物語を語るのか、物語が語るのか。わたしが物語だったのか、物語がわたしだったのか。
見る夢は優しく、夜はあまりにも深い。

此話はすべて遠野の人佐々木鏡石君より聞きたり。昨明治四十二年の二月頃より始めて夜分折々訪ね来り此話をせられしを筆記せしなり。

奇書『遠野物語』は、編者である柳田國男の表白により幕を開ける。民俗学の草分けたるかれの研究は、民間伝承の聞き書きというその独自の技法を世に広める端緒となったものである。その意味で、なるほど本書は、遠野の郷に伝わる奇妙な物語の数々を対象とし、その保存と流布とを目的としたものであったといえることができるだろう。しかしながら、実のところそれはまた、たんなる伝統的な文化の客観的な記録などに始まって終わるものではない。それが証拠に、この冒頭のわずか一段落においてすでにわたしたちは、聴くこと／語ることをめぐる極めて動的な生成の現場に立ち会うことになるのである。

自分も亦一字一句をも加減せず感じたるまゝを書きたり。

語り手は鏡石だったのか、柳田は聴き手だったのか。実はその瞬間、柳田も「亦」語り手の一人となったのではないか。聴くことと語ることを隔てていた境界線が、ゆっくりと揺らぎ始める。客観的なデータの採集を旨とする研究者にとっては、違和感を禁じえない一文であるに違いない。聞いたままを記録するのではなく「感じたままを書く」とは、はたして如何なることなのか。しかも、「一字一句をも加減せず」に、である。けれども実際には、

そもそもなら付け加える必要などないように、差し引かれるべき事柄もそこにはなかった。聴き手であることがまさに語り手であることにほかならない、そのかぎりにおいて。ほどけてゆき、編みなおされる物語。痛みと心地よさが同時に打ち寄せる。

我々はより多くを聞かんことを切望す。

願はくは之を語りて平地人を戦慄せしめよ。

語られた物語は、わたしたちお互いの身体を否定なしに編みあわせてゆく。もはや鏡石独りが語るのではなく、柳田独りが聴くのもない。安堵とともに込みあげる不気味さ。柳田が鏡石を我が家へと迎え入れたのか、鏡石が柳田を異郷へと誘ったのか。「わたしは」ではなく「我々は」と柳田は云う。これまでこの物語に触れてきた数多くの人々の声が、いまここに響きあっている。彼・彼女らもまた、聴き手であると同時に語り手となった人々である。聴くことへの衝動は、語ることへの欲望そのもの。語ることへの欲望はすなわち、懐かしき異郷への期待と不安。柳田が聴き手として物語を記録しようとするまさにそのとき、物語が柳田を語り手として編み込んでゆく。もはやたんに語られた事柄としての物語 (story) への導入ではなく、物語ることそのもの (storytelling) への誘惑とでも呼ぶべき事態がここに立ち現れてくることになる。

2. 遠野郷にて ― 彷徨う人の黄昏に溶けたること

異郷の客人を迎え入れたそのとき、わたしもまた、一人の旅人となったのかもしれない。いまだ見ぬ懐かしき故郷を求めて彷徨う、旅人の一人に。

昨年八月の末自分は遠野郷に遊びたり。花巻より十余里の路上には町場三ヶ所あり。

其他は唯青き山と原野なり。人煙の稀少なること北海道石狩の平野よりも甚だし。

いきおい第二段落では、実際に遠野の郷を旅したおりの柳田自身の印象が描かれることになる。すでに語り手として遠野物語のうちへと編み込まれたものであるかぎり、この遊行は必然であるといわねばならない。したがって、ここでの記述もやはり、たんなる遠野の郷の紹介としてのみ読まれたのでは不十分である。鮮やかな色彩に染められた風景の連鎖の影で浮かびあがってくるのは、彷徨える余所者としての、柳田自身の在りさまにほかならない。

遠野の郷においては、柳田のほう为名も無き旅人として迎え入れられることになるのである。青や紅などの原色や白と黒のコントラストが、決して混ざりあうことのない両者の距離感を表している。

此谷は稲熟すること更に遅く満目一色に青し。細き田中の道を行けば名を知らぬ鳥ありて雛を連れて横ざりたり。雛の色は黒に白き羽まじりたり。始は小さき雞かと思ひしが溝の草に隠れて見えざれば及ち野鳥なることを知れり。天神の山には祭ありて獅子踊あり。茲にのみは軽く塵たち紅き物聊かひらめきて一村の緑に映じたり。

その勇壮な獅子踊りの舞も、旅人には何処か遠く、寂しさをかきたてる。

笛の調子高く歌は低くして側にあれども聞きがたし。日は傾きて風吹き酔ひて人呼ぶ者の声も淋しく女は笑ひ児は走れども猶旅愁を奈何ともする能はざりき。

しかしながら、ここに決定的な変化が訪れる。暮れなずむ陽がいよいよ山の端にかかるとき、それまで旅人を拒み続けてきた風景が一変する。

村人の永住の地を去らんとする者とかりそめに入り込みたる旅人と又かの悠々たる霊山とを黄昏は徐に來りて包容し尽くしたり。

黄昏の暗闇の中で色彩のコントラストがぼんやりと揺らぎ始めるそのとき、旅人はゆっくりと風景のなかに溶け込んでゆくかのである。彼我の隔たりが消滅する、あの官能的で暴力的なときが訪れる。しかもそれは、活動的な主体と客体の位相においてではなく、この世のものならぬ死者の位相における溶解の瞬間である。夕間暮れ、逢魔ヶ時、古来それは、託宣や物語がもたらされるときでもあった。幾星霜を経て編まれてきた物語こそが、此岸と彼岸とをつなぐ媒介となる。これに続く叙述に触れるとき、わたしたちがある種の不気味さに襲われるとすれば、それはこの箇所が愉しくも恐ろしい物語の始まりを予感させるものだからではないだろうか。

此日報賽の徒多く岡の上に灯火見え伏鉦の音聞えたり。道ちがへの叢の中には雨風祭の藁人形あり。恰もくたびれた人の如く仰臥してありたり。

わたしたちはいつのまにか、黄昏にまぎれて、物語の位相、あるいは死者の位相において、遠野の郷へと招き入れられていたのかもしれない。

3. 物語ることへの誘惑——をちかたに宛てて

ある種の畏怖をもって遠野物語へと編み込まれ、遠野の郷において死者の位相へと溶け込んだ柳田にとって、この物語を語り継ぐことはもはや選択の余地のない出来事である。たとえばそれが、当時の時流から外れたことであり、世間の作法に反することであったとしても。

思ふに此類の書物は少なくとも現代の流行に非ず。如何に印刷が容易なればとてこんな本を出版し自己の狭隘なる趣味を以て他人に強ひんとするは無作法の仕業なりと云ふ人あらん。されど敢て答ふ。斯る話を聞き斯る処を見て来て後之を人に語りたがらざる者果してありや。

それは、見聞きした体験について語ることである、というよりもむしろ、その体験からして語らざるをえないということである、と云わねばならない。なぜなら、柳田にとってこの『遠野物語』はもはや、「今は昔の話」を綴った『今昔物語』などとは異なり、まさにいまここで起こりつつある「目前の出来事」にほかならないからである。

要するに此書は現在の事実なり。

したがって、ここで柳田はすでに、それまで属していたはずの一般的な世間（すなわち「平地人」の世界）からは離脱してしまっているといわねばならない。『遠野物語』の出版に対する批判がすべて、「～と云ふ人あらん」などといった表現であくまで他人の言動として述べられているのも、そのことによるのだろう。「彼の大納言殿」を淡泊かつ無邪気なものとして批判し、「近代の御伽百物語」を妄誕なるものとして貶めるとき、柳田と当時の世間一般との距離は相当なものであったと考えられる。

今の事業多き時代に生まれながら問題の大小も弁へず、其力を用ゐる所当を失へりと言ふ人あらば如何。明神の山の木兎の如くあまりに其耳を尖らしあまりに其眼を丸くし過ぎたりと責むる人あらば如何。はて是非もなし。此責任のみは自分が負はねばならぬなり。

その断絶を決定的な仕方ですすのが、結びにおかれた一片の句である。

おきなさび飛ばず鳴かざるをちかたの森のふくろふ笑ふらんかも

世間の人々は、『遠野物語』における柳田の試みを、「あまりに其耳を尖らしあまりに其眼を丸くし過ぎ」た木兎のようなものとして責める。それに対して柳田は、それではまるで年寄りじみた鳴かず飛ばずのふくろうのようなものではないか、と応酬するのである。ここで印象的なのは、世間の人々の象徴であるところのふくろうを柳田が「をちかたの」と呼んでいるところである。ここまでに述べられたことをふまえるなら、この揶揄の意味するところは明らかだろう。物語に編み込まれ此岸と彼岸の境を彷徨する柳田にとって、これまで生きてきたはずのこの世界はもはや遙か遠くの出来事ではない。その意味で、『遠野物語』の冒頭におかれたこの文章は、全体として、あの世からこの世へと宛てた一通の手紙であると見ることができるのではないだろうか。「この書を外国に在る人々に呈す」という献辞も、この地平において改めてその意味を与え返されることになるだろう。

物語はいつも、彼岸へと通じる通路である。それはわたしたちを未知なる世界へと招き入れ、その物語のうちに編み込んでしまう。物語への導入は物語ることへの誘惑に通じている。句の後に挿入された「柳田國男」という署名は、ひるがえって、この後に続く物語が固有名をもたない誰でもない誰かによって語られるべきものであることを暗示しているかのようではないか？ そしてその「誰か」のうちはもちろんのこと、いつもすでに読み手であるわたしたち自身の姿が、鏡写しに現れているのである。

✦引用文献

『柳田國男全集2』筑摩書房 1997年